

# ひとりも、死なせへん



長尾和宏著  
ブックマン社  
1,500円(税別)

コロナ禍をテーマに多くの医療本が出回っているが、本書ほどコトの本質に迫った体験記はないだろう。個人ブログを基に刊行した。著者は尼崎市の自称、「町医者」である。

昨年1月から今年の8月までの診療ぶりを綴る。発熱外来を開設し、約400人のコロナ患者を診てきた。中等症以上の患者もいたが、看取りはゼロ。著者の意気込みと実績が書名になった。

書評

介護・医療業界

注目の一冊

評・ジャーナリスト

浅川 澄一氏

一方、続けてきた在宅医療も、施設や病院から抜け出した患者で多忙を極める。共に診療の様子

が実に詳細に語られる。診療日記である。

コロナ患者への対応は歴史的な証言でもある。後世の歴史家や医療者にとってまことに貴重な教科書になりそうだ。

検査で陽性反応が出たコロナ患者は、保健所に通知しておしまいというのが多くの医療者の姿勢だ。感染症法で決められている。だが、入院までの自宅療養者や施設入居者に著者は在宅医としてじっくりきちんと関わ

診療体験に裏付けられた政策批判も展開する。切れ味がいい。感染症の2類指定をインフルエンザ並みの5類に引き下げ、どの開業医でも対応できるようにせよと訴える。司令塔の保健所に医療者はいない。隔離業務に追われるだけ。それなら在宅医に入院までをす

## コロナ患者を診る在宅医とは

べて任せて欲しい、と説く。「コロナは在宅医の仕事」と言い切っているよう。

自身が処方しているイベルメクチンはよく効くから広めたい、と声を張り上げる。テレビに出演し、イベルメクチン「騒動」を引き起こした。本書でもその正当性を力説。さらに、タバコに言及しない政府に疑問を抱く。いずれも、膝を打つことばかりだ。

コロナで死亡率が高いのは高齢者。認知症であれば地域包括ケアで対応すべきとの提案も在宅医ならではだ。

答えを出し難い鋭い問題提起もある。コロナ肺炎による死者にはリビングウイル表明者がいるはず、と「平穏死」を望んだ高齢者に思いをはせる。人工呼吸器と平穏死は相反する。指定感染症という法の壁に読者も考えさせられる。

週刊誌で取り上げられた記事に、ネットで批判の書き込みをされると、真正面から答えているのも傑作だ。論争大好きな性格がよく表れており、単なる町医者を超え、論客の域に達している。